

[書 評]

政治の固有性をめぐって

森 川 輝 一

(京都大学公共政策大学院教授)

本書の主題はタイトルのとおり「現代思想と政治」であるが、そこに込められた企図は、「と」で結ばれる両者をそれぞれ自明な対象領域と見なすことなく、「と」から出発して逆に両者を捉え直すこと」である(市田良彦「現代思想と政治をめぐる序」, 11頁)。1960年代のフランスを中心に勃興したヨーロッパ現代思想は、アカデミックな研究やジャーナリスティックな論及の対象として今や自明性を獲得するにいたっており、「現代思想家」を論じる際に、ことさら「政治」を持ち出す必要はなくなっている。「政治」の自明性については論を俟たず、「議会政治」から「街頭反乱」まで、さまざまな制度や現象が「政治」という言葉で対象化され、あるいは「政治的」という形容詞を冠して論じられる一方で、「政治(的なるもの)」の内実が問われることはない。こうした「現代思想」と「政治」双方の自明化は、両者各々の内実の「拡散」あるいは「消失」と表裏を成しており、その具体的な現れとして、たとえばドゥルーズ=ガタリの「思想」を「マネージメント」や「インターネット」の分析に活用する「社会学」的応用や、「現実の社会主義」の崩壊以降、西欧自由民主主義を唯一正当な政治体制として自明視した上で、デリダを援用してその「倫理」化をめざし、あるいはフーコーの「統治性」概念をリベラルな「ガバナンス」論につなげようとする昨今流行の「政治哲学」を挙げることができる(「序」, 15-20頁)。だが、1968年5月の「革命」において、「政治」は自明なものではなかった。「すべては政治的である」というスローガンのとおり、

「一九六八年に「政治」は議会から街頭に出て、さらに日常生活を含む「すべて」にまで拡大されたが、「すべてが政治である」というときの「政治」が何であるのか、まるで明らかではなかった。その十年後の講義でおフーコーが逡巡しているように、それは「蜂起」であり「抵抗」であり「革命」であり、しかしそうした言葉で汲みつくされるものではない(「序」, 21-4頁)。仮に「叛乱」と呼ぶとしても、それは「敵-味方の通俗的な政治」には回収され得ない叛乱、つまり叛乱のただなかで、これは何のための、何に対する、何が促している叛乱なのかを絶えず問い続けることを強いられる——「なんなんだ、これは」——出来事であり、そうしたものとしての「固有に政治的な出来事」にほかならない(長崎浩「六八年のなにが政治思想を促したか」, 254-5頁, 傍点評者)。このような「政治」とのかかわりにおいて、「現代思想」を捉え直すべく、著者たちは、「68年の思想」という「ジャーナリスティックなレッテル貼りをむしろ積極的に受け入れ」つつ、「現代思想」が知的な意匠としてアカデミズムのなかで消費されている現状に抗い、「それが初発の時点で「運動」としてもっていた「政治性」をあらためて再生させ」ようとするのである(王寺賢太「あとがき」, 612頁)。

と、分かったようなことを書いてはみるものの、本書の内容に深く分け入って内在的な批評を行う能力を評者は持たない。評者の専攻は、本書で序文から痛烈に批判されている「政治哲学」分野であり、主な研究対象は、「政治哲学」の代表格のひとりとして名の挙

がっているアーレントである。評者がなしているのは、本書が批判する「政治哲学」の側から本書の問いかけに対して批判的応接を試みることではないが、「現代思想」と「政治哲学」との分離や断絶を強調して後者における「政治」の「自明性」に引きこもり、本書の問いかけを回避しようというのではない。本書は、議論を全体として「体系的に限定」することなく、「諸論文があるがままの姿で、すなわち視点はおろか表現のスタイルまで多様なまま提供する」という体裁をとっているが、それは「状況が思考に拡散を強いるときには、相互に折り合いをつけようとするよりは、それぞれの線を強力に引き延ばしていったほうが出会いの展望は開ける、という経験則」による、という（市田「序」、14頁）。ならば評者としては、「政治哲学」の線を引き延ばすことで、「出会いの展望」を開く「連結」の試みに寄与したいと思う。そのためにまず、本書による「政治哲学」批判を、評者なりに「政治哲学」の言葉で捉え直すことから始めたい。

「現代思想」の時代は終わった、「政治」はそれぞれのある種の危機に瀕しているという時代認識は（12頁）、「現代思想」を「政治哲学」に置き換えると、評者自身のものとなる。むろん評者一己の認識に過ぎず、「政治哲学」分野のコンセンサスではない。同分野の内部では、「一九七〇年以降、アーレント、ハーバーマス、フーコーといった思想家たちやとりわけロールズの『正義論』に触発されて活性化した、政治哲学の「復権」という大きな学問的動向」が言祝がれてさえている¹⁾。しかしその「政治哲学」の内実は、本書の視座から見れば、「公共空間」をいかに限定するかに意を注ぐ努力」に過ぎず、「政治の後退」の「先取り／先回り」でしか

ない（「序」、注解55）。要するに、政治を「所詮はコンセンサスを得るプロセス、所詮は「敵」を倒すための力学、所詮は「個」と「全体」の利害調整、等々」に限定したうえで、公正としての正義（ロールズ）や理性的な討論（ハーバーマス）といった「一般的原理」によって、リベラルな「公共空間」のなかに回収しようと躍起になっているだけである（49頁）。71年のロールズ『正義論』登場を契機に復権したという「政治哲学」は、68年5月にあって「すべて」でありえた「政治」をあらかじめ締め出し、「なんなんだ、これは」という問いを封じ込めることで、自らの存立空間を維持してきた、と言ってもよいだろう。評者はこうした「政治哲学」批判におおむね同意しつつ、「政治＝公共空間の限定」という後退の来歴を「政治哲学」内部の視点から捉え直すことにしたいが、その起点となるのは1971年のアメリカではなく、68年5月のバリでもなく、1933年のドイツである。すなわち、本書の随所で名の挙がるカール・シュミットが、「政治的なもの」の防衛をナチに託すことを決断した地点である。

シュミットにとって、政治とは、人民（民族 Volk）が生存（実存 Existenz）を賭けて己の空間を確保する闘争であり、33年春に彼がヒトラーの許に馳せ参じたのも、米英主導の自由主義およびそれに対抗する共産主義というグローバルな運動に対してフォルクの生存圏を防衛するためであった。こうした「政治＝公共空間の限定」という着想は、ナチとの訣別以降も、地球を併呑する「海の空間」と大地に根ざした「陸のラウム」との対向というかたちで引き継がれてゆくが、経済や技術の膨張と侵食から政治的空間を守るというモチーフのうちに、市田のいう「政治の後退」の「先取り／先回り」が如実に現われているといえよう。シュミットは「陸のラウム」の元型を求めて、大地を分割する法の空間たる古代のポリスに遡るが、やはりナチにいつとき民族革命の夢を託したハイデガー

1) 『岩波講座 政治哲学』（1～6、岩波書店、2014年）、各巻巻頭所収の「刊行にあたって」より。

なら、ポリスを存在の真理（^{アレーティア}開け）の空間として、「政治の後退」をポリス喪失以来の「存在忘却の歴史」として捉え直すだろう（29頁）。シュミットやハイデガーがはまり込んだ陥穽を避けながら、「政治の後退＝空間の限定」という課題を引き継ぐ道を模索したのが、33年に国を捨てて「難民」となったアーレントである。難民が生き延びるには、彼（女）が「市民」として帰属しうる「公共空間」を構成しなければならない。そこは存在の真理ではなく複数の活動が出来る演劇空間であり、またその構成原理は「敵」に対する闘争と決断ではなく自由な言論の「パレーシア」でなければならないが、「空間の限定＝政治の後退」という基本線そのものは自覚的に受け継がれている。アーレントは、ランシエールが罵倒するほどには「コンセンサス」に囚われていたわけではなく、むしろ「不和」が露呈される場面（^{シーン}）にこそ政治のはじまりを求めたのであるが、同時に「そこに争いが限定されるよう」（^{アゴラ}）な「広場」の構成に心を砕く点は、ランシエールが批判するとおりであろう（48頁）。「不和」が「叛乱」の奔流となって公共空間そのものを破碎し、人々が「市民」としての生（^{ビオス}）を奪われ、「難民」よろしく剥き出しの生（^{ゾーネ}）を晒す、という事態を恐れるからである。アーレントの「政治哲学」は、いわば33年以後の世界を生き延びる可能性の探究であり、シュミット的な政治に抗いつつ、シュミット的な空間の呪縛から逃れることができない。「現代思想」のなかでこの線を引き継ぐのが、「全体主義」に陥らない「政治共同体」の可能性を、普遍的後退そのものから引き出すこと」に「五月」後の「政治」の課題を見出し、「自らを不断に「脱構築」する「主権共同体」を模索する「デリダ派」のナンシーやラクー＝ラバルトであると言えるだろう（30, 41頁）。

ロールズ由来の義務論的リベラリズムとハーバーマスの熟議民主主義論を二本柱とする現代主流の「政治哲学」は、空間をめぐ

る如上シュミット的な呪縛から、さしあたり無縁であるように見える。アーレント的な「広場」（^{アゴラ}）を近代市民社会に接合し、「政治の後退」を、近代というプロジェクトの完遂という「前進」に転換してみせたのがハーバーマスであるが、この手品のタネは、「市民社会 Zivilgesellschaft」という空間概念そのものにある。それは「ブルジョワ社会 bürgerlich-gesellschaft」とは異なり、経済市場から、また主権国家からも自律した理性的市民の空間なのだ（1990年の『公共性の構造転換』新版序文）。市民社会があるから市民は理性的に討論し、市民が理性的に討論するから市民社会は発展するのだ、というトートロジカルな構造は、ロールズ第二の主著『政治的リベラリズム』（1993）における「公共的理性」と「重合的なコンセンサス」の議論にも明瞭である。かくて「公共空間」は、「正義」や「平等」の実現をめざす倫理的空間となり、そのために市民が「討論」を行う空間として脱暴力化されたように見えるが、所詮は市民社会なる虚構を恃んだ見せかけであることは、冷戦崩壊以後の来し方を一瞥すれば明らかである。たとえばロールズは、先進諸国のリベラルな社会における「主権」の消去を言祝ぎながら、法外国家に対するや、「ならず者」を討伐する主権の発動を説く（小泉論文、67-8頁）。今や「政治哲学」は、市民社会というイメージで覆い隠してきた「政治＝生存空間の限定」というシュミット的な命題と、またその根底に存するとにかく生き延びたいという自らの欲望と、正面から向き合うことを迫られているのだが、そのことを自覚している「政治哲学」者は少ないように見える。

正義だの平等だの福祉だののためではなく、生存のための技法として政治を捉え直すこと——これが引き延ばすべき「政治哲学」の線である、と評者は考える。とりわけ「3.11」後の、と付け加えてもよいが、実は引き延ばしどころか、先細りでしかないのかもしれない。ドゥルーズ／ガタリのいう哲学の「三回

目の再領土化」に背を向け、二回目と一回目、すなわち「一九八九年をもって崩壊した」「近代民主主義」と「古代ギリシアの都市」との間で、問いを反復し直そうというのだから(85-8頁)。とはいえ、いかに先細ろうとも、断ち切ってしまうよりはマシなはずであり、だからこそシュミットのように、生存を自己目的化して気ままに「友-敵関係」を適用する政治に退行する道は避けなければならない。33年以来、そんな政治では生存空間の保持という最小限の政治的目的さえ達せられぬことは明らかなのだが、「友-敵」という形象の分かりやすさ(使いやすさ?)のためか、シュミットの政治をグラムシ的ヘゲモニー闘争に接合するムフヤクラウのように、「政治哲学」におけるシュミットのプレゼンスは依然として高い。そもそも、33年を結び目に「空間の限定」という基本線を引き継いでいる以上、「政治哲学」はシュミットの呪縛から完全には逃れ得ないのであり、それはまた、序論で批判されているように、本書の第二部「資本／闘争」および第三部「主体／精神分析」の問題系を、「政治哲学」が主題化し得ない理由でもある。「政治哲学」は「決定問題を「政治」なるものなかに最初から限定」することで、資本主義の機制を内在的に解明する道を封じ(51頁)、また主体を「無根拠に決断する」主体の「自己構成」の産物と見なすことで、主体(という空虚)の構成をめぐる問いを隠蔽してしまうのであるが(55頁)、いずれも「政治哲学」におけるシュミットの呪縛の証左と言えるだろう(これはまた、評者が本書第二部と第三部の諸論文に内在的な批評を行う能力を欠くことの弁明でもあるのだが)。この点を銘記し、さらには、シュミットの「友-敵」理論の外的注入によるマルクス主義理論の政治化を試みつつ結局のところ「凡庸な」政治的妥協に陥ってしまった「トロンティの隘路」や(中村論文、359頁以下)、いわばシュミットの主権論を存在論化して「たった一つ法」にまで高めることで、ベンヤミンが法の

はじまりに見出そうとした「空隙」を塞いでしまうアガンベンの「呪縛」を警戒しながら(中山論文、449頁以下)、「政治」を捉え直すはじまりを探してゆかねばならない。

その手がかりとして、布施論文が跡付けるシュトラウスの「政治哲学」に目を向けたい。シュトラウスは、「主権者の到来」を夢見るシュミットの「幼児退行」をはじめとする、あらゆる通俗的政治主義に背を向け、いわば「政治の後退」に徹する。彼の「政治哲学」とは、「〈神〉をめぐる無謀な探究として狂気を帯びる哲学的真理」に殉じ、それゆえに市民との衝突を避け得ない哲学者が、哲学の聖域を確保するための、言い換えれば、哲学者が哲学者として生き延びるための空間を保持するための「処方」に過ぎない。だが、かかる「ビジネスライクな政治哲学」に徹することで、シュトラウスは「聖俗の接合部に一瞬穿たれる空隙…狂気を育む僅かばかりの示唆的な隙間をかるうじて確保」しようとしたのではないか(242-5頁)。そこには、78年に「すべて」を拒否して立ち上がったイラン民衆の「狂気じみた反乱」に聖俗の一瞬の隣接を看取したフーコーと、共鳴しあうものがあるのではないか。フーコーは、蜂起をもたらした狂気(霊性)が、その現実的な敗北の後でなお、現実の腐敗と過去の蜂起との空隙で次なる蜂起に向けて自らを「更新」させることを期待していたよしであるが(226頁)、この線を引き延ばすと、箱田論文が光を当てるフーコーの内戦論につながるのではないか。ここで「内戦」とは、シュミットが「主権」と表裏の関係におく「例外状態」の常態化のことではない。たとえば「従属知」が絶えず支配知と相争うように、「社会秩序が戦争そのものなの」であり、その動態的過程たる歴史のなかで、「われわれはつねに戦いの渦中に」あるのだから(203頁以下)。遍在して秩序を揺り動かす言説の抗争が、「匿名の民衆」による言論のパレーシアとして「街路」に溢れ出るとき、それは現実政治をも覆す「祝

祭」となるだろう。上田論文のブランショが凝視した、「一切のことを述べる自由」のなかで炸裂する発話の「匿名性の腐食力」が国家を統べる「英雄」をも脅かすにいたった、68年5月の叛乱のように。だが、68年の「民衆」は、十年前には国家の「空虚」を埋めるべく「英雄」ド・ゴールを担いだ「民衆」でもあり（170頁）、33年という結び目に呪縛された「政治哲学」の徒が想起するのは、ファシズム運動もまた「街路」で始まったという事実であり、匿名の「ひと」の無限定な応答を「政治的」に引き継ぐ道を模索せねばならない（188頁以下）。国家創設というすぐれて政治的な問題を、マキアヴェッリ解釈のなかに探るのが、王寺論文である。『ディスコルシ』で論じられる貴族と民衆の抗争を、自由民主主義体制における国家と市民社会の分裂として捉え直し、後者の階級闘争が前者の空虚を満たし、かつ前者の「構成=国制」を動的に支える構造として読み解くルフォールのリベラルなマキアヴェッリ読解に対し、『君主論』にアルチュセールが看取した「絶対的はじまり」という切断、すなわち不在の国家の創造という実現不可能な存在論的空虚を、主権国家からの「分離」によって自らを「構成」する「人」の力能の場として捉え直すのがネグリである。主権からの絶えざる「分離=構成」によって人民は自らの「構成的権力」を保つ、という構想によってネグリは、創設を主権者の決断に回収してしまうシュミットの短絡のみならず、人民の「構成的権力」に目を凝らしつつ、最終的には国制（憲法）という「構成された権力」の制定と保持に革命の終着点を見るアーレント（やポーコック）の法的な議論をも克服しようとするのである。元来「政治哲学」は、箱田論文が批判するように、政治を法秩序の構成という問題に落とし込み、法秩序の設立によって無法な戦争状態を終わらせ、再発を防ぐ、という思考様式を好む。その典型が、近代の黎明期にさかんに論じられ、20世紀後半

にロールズが再興した社会契約説である。たとえばホッブズの契約説では、「戦争=自然状態」にあつて死の危険に脅える自然人が、互い自然権を譲渡して国家を設立するのであるが、佐藤（淳二）論文によれば、これは「ポスト・デカルト的」状況に対するホッブズの政治的応答である。ホッブズによって、デカルト以降「世界から疎外され」て「根拠も定かでないままに放浪を開始していた」コギトは、生き延びるために「自由」や「平等」を譲渡可能なモノとして譲り渡し、「国家論という広大な地平に囲い込まれたのである」。だが、ホッブズの自然状態を人為的虚構と批判したルソーにとって、自然状態は戦争状態ではない。ルソーの自然人は身体と合一した「コギト」の「作用」であり、自然と一体化した「普遍人」である（135-8、150-2頁）。ルソーの自然状態からすべてを始め直すとき、ホッブズからシュミットを経て、今日まで生存空間の構成を追求してきた「政治哲学」全体が、とにかく生き延びたいという欲望の自明視も含めて、根底から覆されることになるのかもしれない。

以上、第一部「政治／哲学」所収の諸論文に不十分ながらコメントを試みてきた評者は、最後に、ラカンおよび精神分析についての完全な無知を曝け出すことを恐れつつ、ラカン（派）の「政治」に論及した上尾論文と立木論文に触れる。精神分析の「守るべき領土」をめぐる闘争と制度化という、実に具体的な政治的実践が語られているからである。そこで焦点となる「パス」とは、「司牧」化を回避しつつ、構成員が「学派を進歩させる責任を負」い、また「学派の経験そのものの分析家とな」り、分析家の欲望を自らのものとしながら、運動を持続させてゆくための「制度」である、という。そこに、惑星大に広がった資本や科学技術の下でなお革命への「狂気じみた欲望」を育むための空隙を構成し、また、叛乱組織が「大衆前衛」なる背理に陥ることなく、「なぜ叛乱は在るのか」と問い続けて

「固有の党」の可能性を保持するための組織形態（長崎論文）を見ることはできないか。とはいえ、その運動全体を支えていたのがラカンという「絶対的「主」」であるなら（603頁以下）、マキアヴェッリの「君主」問題、すなわち創設における「絶対者」の難問は未決のままである、ということなのか——

この点も含め、本書執筆者の間では多岐に

亘る議論が交わされたことであろう、と評者は想像する。そして、議論が現在なお続いており、いくつもの線に引き延ばされてゆくことを確信する。無数の線が織り成す結び目のどこかで、再び出会い、戦慄に襲われることを予期しつつ——「なんなんだ、これは」。

（文中敬称略）